道頓堀

風の中のグリーンベルト

道頓堀

約400年の歴史を持つ、大阪ミナミの中心地。2004年に戎橋から太左衛門橋の南岸に遊歩道が整備され、川側からの出入りが出来るようになり、活性化が期待されている。現在は道頓堀川に観光船が通い、地元商店会によって催し事が開催されている。

写真：かつての太左衛門橋と現在の様子（上段）と夜に開催される灯籠流しの様子（下段）

黒門市場商店街

大阪の町人の食い道楽を満喫する街として、日本最大の食の街としても栄えてきた。かに道楽のカニ、つぼらやのフグなどの大型看板があふれており、海外からの観光客を含め連日人盛わっている。

写真：夜間は多種多様な看板がライトアップされ、昼夜を問わず人がごった返している。

宗右衛門町

宗右衛門町はかつて花街として発展し、多くの料亭がのれんが軒を連ねていた。格調高く、洗練された、日本有数の食・遊文化を誇ってきた。近年「食と酒、川のある街へ」をコンセプトに電線の地中化と石畳化へむけての再整備計画が進んでいる。

再整備後のイメージ

問題意識

大阪市内の熱環境の等温分布をみると、淀屋橋・難波、本町・谷町で囲まれた中心部は35～37℃と周辺部よりも1～3℃高温であり、いわゆる"ヒートアイランド現象"が生じている。一方、図中の南西に位置する大阪城公園、靱公園周辺の温度分布は、中心部に比べ最大5℃程度低く、大規模な公園緑地が気温上昇を抑制する効果を発揮していることがわかる。しかし、市内北部に比べて南部は10ha超級のまとまった緑地がなく、一帯が35℃を超す高温地帯となっている。

効果

既存の大規模緑地の位置関係に注目すると、市内北部に半月状に配置されていることがわかる。そこで、南部にまとまった緑地を配置することにより、大阪市内の緑地を同心円状につなぐグリーンループ（環状緑地）が完成する。南部一帯の温度を抑制するだけでなく、既存の緑地や河川などクールスポット間の機能を高める相乗効果が期待できる。

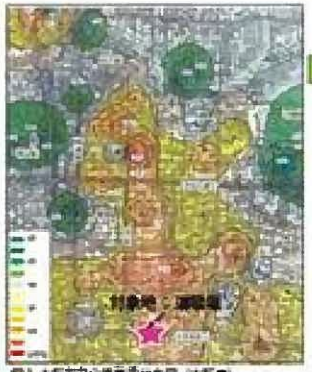


図1 大阪市中心部等温分布図（大阪府）
平成14年7月7日19時調査

グリーンループ
大阪市内の公園緑地を環状配置することでクールスポットの相乗効果が期待される。

図2 大阪市内の主な公園緑地および淀川河川

対象地

道頓堀＝海風とグリーンループの交差軸

市内でも特に高温域が集中している堺筋・松屋町筋と、高温地帯の中央を通る千日前通りが交差する部分に対象地を設定する。大阪市は大阪湾と内陸の上町台地との中間に位置しているため、基調は海から西風が吹き込む。このとき風が道頓堀川や公園緑地などの上空を通り抜けると、海からの冷気を保ったまま風が市内まで運ばれる。道頓堀は大阪湾からの海風を内陸まで運ぶ風の道の役割を果たしているため、緑の少ないミナミを冷やすポテンシャルを持つ。実際に道頓堀周辺の温度分布をみると、西側からの冷気が東側にいくほど温められ、高温になっていることがわかる。つまり、道頓堀を通り抜ける風を涼しく保つことができれば、市内の内陸部にまで涼風が届き、ミナミの高温地帯を緩和できる。さらには既存の緑地とグリーンループをつくり、大阪市内全域のヒートアイランド現象を抑制できる。

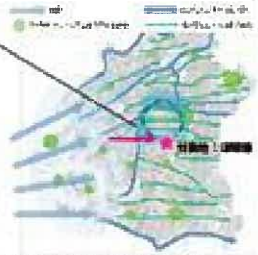


図3 大阪湾からの風の道（大阪府）

対象地：道頓堀の遊歩道が整備されている日本橋から浪速橋間

図4 道頓堀周辺の温熱マップ

現況分析

【問題点】

▼太陽の光と熱が暑い
- 日陰を造るものがない
- 緑陰を生み出す高木が少ない

▼人気がない（特に昼間）
- 快適に滞留できる場所が少ない
- ‘水路感’の印象を感じる

▼場所のつなぎに違和感
- 隣接する街区の雰囲気との不調和
- 両岸の建物が超高密度で圧迫感

写真：関西新道頓堀（上）と整備された遊歩道（下）

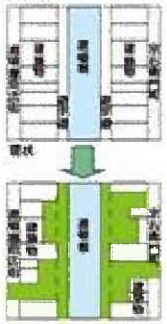
道頓堀に新しい“場”として期待した観光客の受容の仕方が道頓堀を盛り上げる。

コンセプト

「風と水と緑で道頓堀を涼しく」

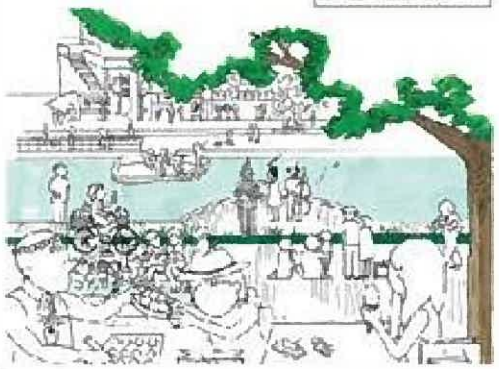
- 沿岸建築物を一部セットバック
- 大阪湾から風の通り道を広げる
- 通り抜ける風を冷やす
- 雨水や地下水を利用した噴水
- 緑陰で地表に届く日射をカット
- 緑の蒸発散機能
- 緑被量を増やし見た目にも涼しく

模式図



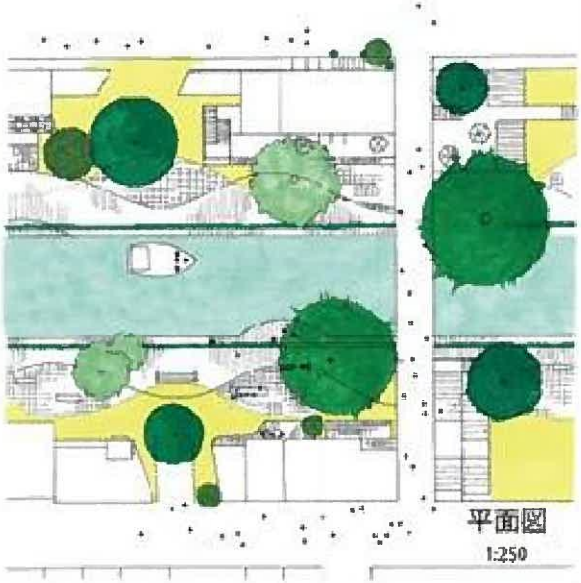
ポケットパークの連続
＝グリーンベルト

道頓堀沿い建築物のある一部はセットバックさせ、ある一部は移転させ、建築物の密度と圧迫感を軽減させる。新たした空間に設けた緑地は、道頓堀のグリーンポケットであり、一つの規模は小さいながらもベルトのように連続性を持つことで豊富な緑量で存在感を示す。



提案

○道頓堀川と両岸の通りとを豊かな緑でやわらかく立体的につなぐ
○大阪湾からの海風が道頓堀川を抜け、両岸から通りに涼しさが運ばれる



平面図
1:250

道頓堀川

沿岸建築物をセットバックさせ、堀川と両岸の通りをやわらかく結ぶバッファーとして整備する。
通りから堀川に立ち寄りやすくなるように、
- 川に対して垂直に（堀に対して平行に）移動できるなだらかな階段を設けた
- 両岸の通り（地上部）と堀川（地下階）の中間にデッキを設け、オープンカフェや噴水広場など滞留できる場所を設けた

また、これまでよりもさらに川に近づきやすくなるように、
- 水面に張りだしデッキを設けた。眺望できる場やミニ舞台にもなる
- 遊覧船と両岸との交流を促すため、河川に平行方向に橋桁等を設けた

デッキのデザインには木板と石板とが波のように風のように混じりながら緩やかに流れていくことをイメージした。

宗右衛門町側

両整備計画で掲げられているコンセプト「酒と食、川のある街」をイメージし、全体的に和の印象にまとめた。
かつての花街を連想させる石畳の路面舗装や、のれんやのぼりなどの布を用いた看板、瓦屋根や手水鉢が似合う風格高い大人の街。
和風の料亭だけでなく、和フレンチのレストランやカフェ、バーも所要文化として溶け込み、20～30代の層でも立ち寄りやすい雰囲気にした。

道頓堀商店街側

観光客が多く、飲食店や土産屋が所狭しと軒を連ねる雑多でにぎやかな空間であることから、
道頓堀川側の半屋外形態の店舗をデザインした。中二階の木造のデッキで食い倒れ文化を堪能できる。
堀川と商店街を結ぶ中央に配置した噴水は道頓堀周辺に昔ったお水を利用しており、水音が賑やかさと涼しさを演出する。

断面図